

私たちは神に造られたものである

今日ご一緒に読んだ歴代記には、イスラエルの民がバビロンの捕虜として連れていかれ、再びイスラエルに戻れるようになった出来事が記されています。

当時、捕虜として連れて行かれることは、まさに奴隷になることを意味しました。過去の自由な人生に戻れる希望はありません。気楽で安らかな生活は夢にも見ることはできません。イスラエルの民にどんな過ちがあって、バビロンの捕虜になって連れていかれたのでしょうか。歴代記には、「諸国の民のあらゆる忌むべき行いに倣って罪に罪を重ね、主が聖別されたエルサレムの神殿を汚した」（2歴代 26:14）からであると記されています。それでは「諸国の民のあらゆる忌むべき行いに倣うこと」とはどういうことでしょうか。それは、神様と神様のみ言葉を遠ざけ、「物質的な貪欲」と「世俗的な快樂」に陥って生きていくことです。彼らが偶像を崇拝したのも、偶像が貪欲を満たしてくれるし、快樂をもたらしてくれると信じていたからです。

しかし、驚いたことに、捕虜になったイスラエルの民は、イスラエルに帰ることができました。人類の歴史上類例のないことです。ある方は想像の話ではないかとおっしゃるかもしれませんが、けれども、ペルシアの遺跡地で発見した「キュロス・シリンダー」というものに記されている文章から、捕虜の帰還は歴史的な事実であることが確認されました。神様の恵みは私たちの想像を超えます。ですから信仰者は自分の人生を神様に委ねて、神様のみ旨に従って生きていけば良いのです。そうすれば、神様はいつも必要なものを備えてくださいます。

今日ご一緒に読んだ福音書の内容はあまりにもよく知られているので、信仰を持たない人の中にも知っている人が多いのです。ある方にとっては、この物語はまるで昔話や童話のように思われるかもしれませんが、けれどもこの物語は、「神様はいつも私たちに必要なことを備えてくださる」というメッセージを宣べ伝えるためのものです。

この「パン五つと魚二匹」の奇跡はまったく神様の恵みとみ力によって行われたものです。今日私は皆さんに先ず2つの場面に注目なされることをお勧めいたします。

一番目は、この奇跡は、子供がイエス様に差し上げた「パン五つと魚二匹」から始まったということです。ヨハネ福音書には、この奇跡が行われたところは山であると記されています。人々は、山におられるイエス様を訪ねてきて、み言葉を聞き、病も癒されました。やがて夕方になりました。彼らを解散させ、各々の家に帰らせなければなりません。けれども彼

らは一日中何も食べていませんでした。そのまま家に帰らせると疲れて倒れてしまうかもしれません。どうすればよいでしょうか。イエス様がフィリポにお聞きになりました。

「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか。」(ヨハネ 6:5)

そこに集まっていた人は男だけでもおよそ 5 千人でありました。フィリポはさっそく計算してこのように答えました。

「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう。」(ヨハネ 6:7)

フィリポはとても合理的であり、現実的に判断する人であったようです。当時一デナリオンは労働者一人の一日の賃金でした。フィリポは、労働者の 8 か月分の賃金をもってパンを買ったとしても足りないと思っていたのです。しかもここは人里離れたところなので、パン屋があるわけでもありません。けれどもある少年が「パン五つと魚二匹」をイエス様に差し上げました。この少年が「パン五つと魚二匹」をイエス様に差しあげなかったとしても奇跡は起きたのでしょうか。信仰深い方は、イエス様が他のやり方をもって奇跡を行われるはずであるとおっしゃるかもしれません。けれども私は、この「パン五つと魚二匹」があったからこそ、イエス様が奇跡をなさることができたのだと思います。この少年の人情深く純粋な心が奇跡の動因であったのです。それでイエス様は、「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(マタイ 18:3)とおっしゃったのです。

二番目に注目すべき事はイエス様の心です。皆が飢えている状況でフィリポは「二百デナリオン分のパンでは足りない」と言いました。アンデレは少年が持ってきた「パン五つと魚二匹」をイエス様に渡しながらか「こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」(ヨハネ 6:9)と言いました。フィリポとアンデレの考えはとても理性的であり、常識的です。けれども問題を解決することはできません。

イエス様は、この「パン五つと魚二匹」を取り、感謝の祈りを唱えました。どうやってイエス様は、このような状況で「感謝の祈り」をお唱えになったのでしょうか。皆が予想もできなかったことでした。ところで、まさにこの「感謝の祈り」が奇跡を起こした決定的な力でありました。小さなものにも感謝する心がこの世の中を変える力になります。それはまた、「神様はいつも私たちに必要なものを備えてくださる」という信仰でもあります。ヨハネ福音書には、「食べて、残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった」(ヨハネ 6:13)と記されています。これは、この奇跡がどれほど豊かであったのかを示しています。その恵みを信じて、私たちは私たちの人生を神様に委ねて生きていくことができます。

ヨハネ福音書には理解に苦しむもう一つの場面があります。それは、このような「パン五つと魚二匹」の奇跡を見た人々の反応です。彼らは、イエス様こそ「世に来られる預言者で

ある」と言って、「自分を王にするために連れて行こうとしていました」(ヨハネ 6:14-15)。彼らは、王様としてイエス様に仕えれば、少なくとも食べ物の問題は解決できると思っていたかもしれませんが。けれどもイエス様は彼らを避けて一人で山に行かれました。なぜイエス様は彼らを避けたのでしょうか。彼らの協力をもらって王様になったら、天の国をたてることももっと容易くできるのではないのでしょうか。み言葉を宣べ伝えることも王の権威をもってすれば、より効果的にできるのではないのでしょうか。

イエス様を王としてそれに仕えようとした人々は、イエス様が見えなくなっても、すぐに彼らの意図を諦めませんでした。続くヨハネ福音書の内容を見ると、彼らは「その翌日も…イエス様を捜し求めて、ついにイエス様のおられるカファルナウムにまで」(ヨハネ 6:22, 24)訪ねて来ました。その時イエス様は彼らにこのようにおっしゃいました。

「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」(ヨハネ 6:26-27)

彼らにとってパンの問題が解決されれば、人生の全ての問題が解決できるのでしょうか。そうではありません。パンの問題が解決できても、まだ別の問題が残っているか、また別の問題が起こるかもしれません。そして、絶えず他の苦しみを経験しながら生きていかなければならないかもしれません。問題と苦しみがどういうわけで起こるのか一言で話すのは難しいです。もしかしたら、イエス様のおっしゃったとおり、私たちが「永遠の命に至る食べ物」を得るために働かなかったからかもしれません。

今日ご一緒に読んだエフェソ書を通して使徒パウロは、私たちの胸の中に大切に収めるべきことを教えてくれています。それは、「私たちは神に造られたものである」(エフェ 2:10)ということです。私たちは神様のみ手によって造られたものですから、神様はいつも私たちに必要なものを備えてくださいます。ですから自分の人生を神様に委ねて生きていけば良いのです。その信仰が「永遠の命に至る食べ物」を得られる道でもあります。

相変わらずコロナによって多くの人が苦しんでいます。けれども信仰者にとってはよりどころがあります。神様も私たちの苦しみをよくご存じです。神様は、私たちがこの困難を乗り越えていくことができるように、私たちに必要なものを備えてくださるでしょう。それも私たちの想像を超える豊かな恵みをもって備えてくださるでしょう。今日ご一緒に読んだ聖書日課のみ言葉は、それを教えてくれるメッセージです。バビロンに捕虜になって連れて行かれた時も戻らせてくださり、「パン五つと魚二匹」の奇跡をもって五千人を超える民を満腹させてくださったように、今日の私たちにも、きっと豊かな恵みを与えてくださるでしょう。ですから「私たちは神に造られたものである」という信仰を胸の中に深く刻み、祈りながらこの困難を共に乗り越えていきましょう。

この一週、限りなき神様の恵みが、皆様と皆様のご家庭に満ち溢れますように心からお祈りいたします。